

上代文献資料における漢字「夢」の分布と考察

藤崎, 祐二
有明工業高等専門学校

<https://hdl.handle.net/2324/7395356>

出版情報 : 文献探究. 63, pp.23-40, 2025-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



上代文献資料における漢字「夢」の分布と考察

藤崎 祐 二

一 はじめに

上代の文献資料に描かれる託宣には、主に憑依現象を伴う場合と、夢を介する場合がある。筆者はこれまでの研究において、主に憑依現象に着目してきたが、上代における神と人間との関係性を論じるにあたっては、夢を介する託宣をないがしろにはできない。憑依を伴う託宣と、夢を介する託宣には、どのような違いがあるのだろうか。上代の人々は両者にどのような相違を見ていたのだろうか。本稿では、上代における神と人との関わりを詳細に論じるための足掛かりとして、同時代の文献資料を中心に「夢」の用例を掲げ、概観できるようにし、若干の考察を行うこととする。

『古事記』『風土記』『日本書紀』『懐風藻』『万葉集』『三教指帰』『日本国現報善悪霊異記』の七つの資料から用例を集め、『懐風藻』と『三教指帰』は日本古典文学大系（岩波書店）に拠り、その他の作品は新編日本古典文学全集（小学館）に拠った。まず、各用例に番号を付し、適宜巻数やテキスト内の見出しなどを記した。例えば「1上・序・古代の回想」とある場合、「1」は初出の用例であることを示しており、「上」は上巻、「序」は序文、「古代の回想」はテクス

ト独自の見出しである。次に、原文と訓み下し文を並列して掲げ、それぞれの頁数と行数は、「」内にアラビア数字で示した。その際、複数冊に跨る資料の場合は、頁数の前に小番号で冊数を記した。例えば「〔23・12〕」とある場合は、「1冊目の23頁の12行目」を意味する。また、万葉仮名表記の「イメ」の用例には、番号の上に▼印を付した。

二 各資料の用例

◆『古事記』

1 上・序・古代の回想

即、覚^{すなは}夢^{いめ}而^{さし}敬^{あつ}神^う・祇^{かみ}、所以^{ゆゑ}称^{なづ}賢^{さか}后^{きみ}。〔18・3〕
即ち、夢^{いめ}に^{さし}覚^{あつ}りて^う神^{かみ}・祇^{かみ}を^{あや}敬^まひたまひ、所以^{ゆゑ}に^{さか}賢^{さか}しき^{きみ}后^{きみ}と^た称^{なづ}へたり。〔19・1〕

2 上・序・古事記撰録の発端

聞^い夢^{いめ}歌^{うた}而^{さし}相^{あひ}纂^む業^{わざ}、投^な夜^よ水^{みづ}而^{さし}知^し承^つ基^{もと}。〔18・8〕
夢^{いめ}の^{うた}歌^{うた}を^き聞^ききて^あ業^{わざ}を^あ纂^むが^むこと^をを^あ相^あひ^たま^ひ、夜^よの^{みづ}水^{みづ}に^い投^なりて^も基^{もと}を^あ承^つけ^むこと^をを^あ知^しり^たま^ひき。〔19・10〕

3 中・神武天皇・熊野の高倉下

故、天神御子、問下獲^二其横刀^一之所由上、高倉下答曰、己夢之^一。[146・37]
故、天つ神御子、其の横刀を獲し所由を問ひしに、高倉下が答へて曰ひしへ、^一「己が夢みしへ、」[147・1]

4 中・神武天皇・熊野の高倉下

故、如^二夢教^一而、且見^二己倉^一者、信有^二横刀^一。[146・10]
故、夢の教の如く、且に己が倉を見れば、信に横刀有り。[147・12]

5 中・崇神天皇・神々の祭祀

爾、天皇愁歎而坐^二神牀^一之夜、大物主大神、顯^二於御夢^一曰、[182・9]
爾くして、天皇の愁へ歎きて神牀に坐しし夜に、大物主大神、御夢に顯れて曰ひしへ、[183・9]

6 中・垂仁天皇・沙本毘古と沙本毘売

吾見^二異夢^一。從^二沙本方^一暴雨零来、急沾^二吾面^一。[198・8]
吾、異しき夢を見つ。沙本の方より暴雨零り来て、急に吾が面を沾しき。[199・10]

7 中・垂仁天皇・沙本毘古と沙本毘売

如此之夢、是有^二何表^一也。[198・10]
如此夢みつるは、是何の表にか有らむ」といひき。[199・12]

8 中・垂仁天皇・本牟智和気の御子

於是、天皇、患賜而、御寢之時、覺^二于御夢^一曰、[206・3]
是に、天皇、患へ賜ひて、御寢しませる時に、御夢に覺して曰はしへ、^一[206・18]

9 中・仲哀天皇・氣比大神

爾、坐^二其地^一伊奢沙和氣大神之命、見^二於夜夢^一云、[252・5]
爾くして、其地に坐す伊奢沙和氣大神之命、夜の夢に見えて云ひしへ、^一[253・4]

『古事記』における夢は二種類に大別できる。一つは、言葉によって神意が明確に示される託宣であり、もう一つは、解釈を要する抽象的かつ暗示的な夢である。

1、2は序文における用例である。1は崇神天皇の、2は天武天皇の事績の概略記事に見え、いずれも夢が天皇の政治的判断に影響を及ぼしている。短い序文のうちに二度も夢に言及することは、『古事記』が夢を重視している可能性を窺わせる。1の夢は、崇神天皇の条に詳細があるため、神意の明確な託宣であることが知られるものの、2の「夢の歌」は詳細不明である。1とは異なり、夢解きを要するような抽象的な内容であった可能性もある。

夢に関連する記事は、神代に相当する上巻にはなく、中巻の神武東征の記事以降、天つ神から連なる皇統の正統性を確認するかのよう^一に現れるようになる。3、4、5、8、9は、いずれも夢の中に神が現れて、明確に意思を伝達する託宣の用例である。6、7は垂仁天皇が自身の見た抽象的な夢について話をする場面で、夢解きを要する。天皇の身に迫る危機を知らせる内容であるが、何者の意思によって警告がなされたかは不明である。神武記における皇祖神の加護の数々を思い合わせるならば、この場合も同様に推測することが可能かもしれない。ただ、垂仁自身が神託を請う描写がないため定かではない。

下巻では再び夢に関連する記述がなくなる。中巻は、神々の世界を物語る上巻と、人間の世界を物語る下巻に挟まれており、神と人との交流が盛んな時代という見方がある。中巻に夢の記述が集中することには、そのような特徴が関係しているのかもしれない。以上、全九例中、意思が明確に示される夢が六例、抽象的な夢が二例、いずれとも判別できない夢が一例であった。

◆『風土記』

- 1 播磨・飴磨の郡
品太天皇、登_二於夢前丘_一、而望見者_レ。 [40・4]
品太の天皇、夢前の丘に登りて望見したまへば。 [41・3]
- 2 出雲・出雲の郡
夢至此處礪窟之辺_一者必死。 [212・11]
夢に此處の礪の窟の辺に至らば必ず死ぬ。 [213・14]
- 3 出雲・仁多の郡
大神夢願給_レ、「告_二御子之哭由_一」。 [250・17]
大神夢に願ぎ給ひしへ、「御子の哭く由を告らせ」。 [251・17]
- 4 出雲・仁多の郡
「告_二御子之哭由_一」、夢尔願坐_レ。 [252・1]
「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ぎ坐せば。 [252・13]
- 5 出雲・仁多の郡
則夜夢見_二坐之御子辞通_一。 [252・1]
すなはち夜夢に御子辞通ふと見坐しき。 [252・13]
- 6 肥前・養父の郡

- 夢見_三臥機_一 謂_二久都毗枳_一。絡塚 謂_二多々利_一。儂遊出来、圧_二驚珂是古_一。
[316・6]
夢に臥機 久都毗枳と謂ふ。と絡塚 多々利と謂ふ。と儂ひ遊び出で来、
珂是古を圧し驚かすと見き。 [317・6]
- 7 逸文・撰津の国 前田家本『积日本紀』卷十二「菟餓野鹿」条
雄伴郡。有_二夢野_一。 [428・11]
雄伴の郡。夢野あり。 [427・9]
 - 8 逸文・撰津の国 前田家本『积日本紀』卷十二「菟餓野鹿」条
「今夜夢、我背尔雪零於祁利止見支」。 [428・15]
「今夜の夢に我が背に雪零りおけりと見き」といふ。 [427・14]
 - 9 逸文・撰津の国 前田家本『积日本紀』卷十二「菟餓野鹿」条
「須々紀村生多利止見支。此夢何祥」。 [428・16]
「すすき村生ひたりと見き。この夢は何の祥ぞ」といふ。 [427・15]
 - 10 逸文・撰津の国 前田家本『积日本紀』卷十二「菟餓野鹿」条
故名_二此野_一曰_二夢野_一。 [429・5]
故_レ、この野を名けて夢野と曰ふ。 [428・8]
 - 11 逸文・撰津の国 前田家本『积日本紀』卷十二「菟餓野鹿」条
俗説云、「刀我野尔立留真牡鹿母夢相乃麻尔麻尔」。 [429・5]
俗、説くて云はく「刀我野に立てる真牡鹿も夢相のまにまに」といふ。 [428・9]
 - 12 逸文・尾張の国 前田家本『积日本紀』卷十「誉津別命及壮而不言」条
乃後、皇后夢、有_レ神告曰_レ。 [452・3]
皇后の夢に神ありて告げて曰りたまはく [451・4]

『古事記』では、言葉によって神意が明確に示される夢と、抽象的かつ暗示的な夢の二種類に大別したが、『風土記』においては両者に加え、その中間に位置するような夢も存する。即ち、抽象的かつ暗示的でありながら、神の存在を認識し得る夢である。該当するのは、3・4・5・6の四例である。3・4・5は、物を言わず泣きわめく子を扱いあぐねた大穴牟遲命が神託を請うたところ、子どもの言葉が通じるようになる夢を見る例である。神託であることは疑いないものの、神の姿は現れず、言葉による意思の伝達もない。6は臥機と絡塚に体を押さえつけられる夢を見て、神の正体が織物の女神であることを悟るという内容である。解釈を要する抽象的な夢であるが、神が正体を顕す神託であると考えられる。

神意が明確に示される託宣は12の一例で、自身を祭れば皇子が話せるようになることを告げる。抽象的かつ暗示的な夢は、8・9・11の三例である。鹿の夢合わせの説話で、抽象的な夢に不吉な解釈を加えることで、現実になってしまうという内容である。夢に神の意思が介在しているのか分からない点において、『古事記』の6・7に類似する。

以上、全十二例中、神意が明確に示される託宣が一例、抽象的な夢が三例、神託ではあるものの抽象的な夢が四例であった。その他の四例について付言すると、2は、夢の中で行くと、現実において必ず死ぬという洞窟についての伝承である。1「夢前の丘」7・10「夢野」はいずれも地名である。

◆『日本書紀』

- 1 卷三・神武即位前紀戊午六月
 忽夜夢、天照大神謂^レ武甕雷神^一曰^レ、^{〔202・8〕}
 忽^レに夜夢みらく、天照大神、武甕雷神に謂りて曰はく、^{〔203・10〕}
- 2 卷三・神武即位前紀戊午六月
 依^二夢中教^一、開^レ庫視^之、^{〔204・1〕}
 夢の中の教に依り、庫を開きて視るに、^{〔204・13〕}
- 3 卷三・神武即位前紀戊午六月
 時夜夢、天照大神訓^二行之路^一。 ^{〔204・5〕}
 時に夜夢みたまはく、天照大神、天皇に訓へまつりて曰はく、^{〔205・5〕}
- 4 卷三・神武即位前紀戊午六月
 此鳥之来、自叶^二祥夢^一。 ^{〔204・7〕}
 「此の鳥の来ること、自づからに祥き夢に叶へり。 ^{〔205・8〕}
- 5 卷三・神武即位前紀戊午六月
 夢有^二天神^一訓之曰^レ、 ^{〔210・8〕}
 夢に天神有りて訓へて曰はく、 ^{〔211・8〕}
- 6 卷三・神武即位前紀戊午六月
 天皇祇承^二夢訓^一、依以將^レ行。 ^{〔210・11〕}
 天皇、祇みて夢の訓を承り、依りて行ひたまはむとす。 ^{〔211・13〕}
- 7 卷三・神武即位前紀戊午六月
 天皇既以^二夢辞^一為^二吉兆^一、 ^{〔212・2〕}
 天皇、既に夢の辞を以ちて吉兆としたまひ、 ^{〔212・16〕}
- 8 卷五・崇神七年二月

- 冀亦夢裏教之、以畢^二神恩^一。〔272・2〕
冀はくは亦夢裏に教へて、神恩を畢へたまへ」とのたまふ。
〔273・1〕
- 9 卷五・崇神七年二月
是夜、夢有^二一貴人^一。〔272・3〕
是の夜に、夢に一貴人有り。〔273・2〕
- 10 卷五・崇神七年二月
共同夢而奏言、〔272・8〕
共に同じ夢みて奏して言やへ、〔273・8〕
- 11 卷五・崇神七年二月
昨夜夢之有^二一貴人^一。〔272・8〕
「昨夜の夢に一貴人有り。〔273・9〕
- 12 卷五・崇神七年二月
天皇得^二夢辭^一、益飲^二於心^一。〔272・11〕
天皇、夢の辭を得て、益心に飲びたまひ、〔273・12〕
- 13 卷五・崇神九年二月
天皇夢有^二神人^一、誨之曰、〔276・9〕
天皇の夢に神人有して、誨く曰はへ、〔277・5〕
- 14 卷五・崇神九年四月
依^二夢之教^一、祭^二墨坂神・大坂神^一。〔276・12〕
夢の教に依りて、墨坂神・大坂神を祭りたまふ。〔277・9〕
- 15 卷五・崇神四十八年正月
不知、曷為^レ嗣。各宜^レ夢。〔288・3〕
知らず、曷をか嗣とせむとごふいとを。各夢みるべし。
〔289・1〕
- 16 卷五・崇神四十八年正月
朕以^レ夢占之。〔288・3〕
朕夢を以ちて占へむ」とのたまふ。〔289・2〕
- 17 卷五・崇神四十八年正月
淨沐而祈寐、各得^レ夢也。〔288・4〕
淨沐して祈りて寐ね、各夢を得たり。〔289・3〕
- 18 卷五・崇神四十八年正月
兄豊城命以^二夢辭^一奏^二于天皇^一曰、〔288・5〕
兄豊城命、夢の辭を以ちて天皇に奏して曰はへ、〔289・4〕
- 19 卷五・崇神四十八年正月
弟活目尊以^二夢辭^一奏言、〔288・6〕
弟活目尊、夢の辭を以ちて奏して言やへ、〔289・6〕
- 20 卷五・崇神四十八年正月
則天皇相夢、謂^二二子^一曰、〔288・7〕
則ち天皇相夢したまひ、二子に謂りて曰はへ、〔289・8〕
- 21 卷六・垂仁即位前紀
因^二夢祥^一、以立為^二皇太子^一。〔298・7〕
夢の祥に因りて、立ちて皇太子と為りたまふ。〔299・9〕
- 22 卷六・垂仁五年十月
朕今日夢矣、錦色小蛇繞^二于朕頸^一。〔308・7〕
朕、今日夢みらく、錦色の小蛇、朕が頸に繞る。〔309・8〕
- 23 卷六・垂仁五年十月
故今日夢也、必是事^レ應焉。〔310・2〕
今日の夢は必ず是の事の應ならむ。〔310・16〕
- 24 卷九・神功撰政六十二年

- 妹乃託夢言、〔^②464・2〕
 妹乃ち夢に託けて言さく、〔^②465・1〕
- 25 卷九・神功撰政六十二年
 今夜夢見「沙至比跪」。〔^②464・2〕
 「今夜の夢に沙至比跪を見たり」とまをす。〔^②465・1〕
- 26 卷十一・仁徳十一年十月
 時天皇夢有_レ神、誨之曰、〔^②36・8〕
 時に天皇の夢に神有りて、誨へて曰したまはく、〔^②37・11〕
- 27 卷十一・仁徳三十八年七月
 吾今夜夢之、白霜多降之覆_二吾身_一。〔^②54・2〕
 『吾、今夜夢みらく、白霜多に降りて吾が身を覆ふと。』〔^②55・2〕
- 28 卷十一・仁徳三十八年七月
 鳴牡鹿矣隨_二相夢_一也。〔^②54・7〕
 『鳴く牡鹿も相夢の隨に』と云ふ。と云ふ。〔^②55・8〕
- 29 卷十六・武烈即位前紀
 會はむとぞ思ふ〔^②271・16〕
 (音仮名)阿波夢登茹於謀賦〔^②270・13〕
- 30 卷十六・武烈即位前紀
 破れし柴垣〔^②273・2〕
 (音仮名)耶黎夢之魔柯枳〔^②272・5〕
- 31 卷十六・武烈即位前紀
 (音仮名)夢須寐陀黎〔^②272・10〕
 結び垂れ〔^②273・7〕
- 32 卷十九・欽明即位前紀
 天皇幼時夢、〔^②356・4〕

- 天皇、幼くましましし時に夢みたまはく、〔^②357・5〕
- 33 卷十九・欽明即位前紀
 姓字果如_二所夢_一。〔^②356・6〕
 果して所夢にみたまひしが如し。〔^②357・9〕
- 34 卷十九・欽明即位前紀
 歎_二未曾夢_一。〔^②356・7〕
 未曾しき夢なりと歎きたまふ。〔^②357・10〕
- 35 卷十九・欽明二年三月
 夢皇女〔^②364・3〕
 夢皇女〔^②365・2〕

『古事記』と同様に、『日本書紀』の神代にも「夢」の記述はなく、初出は神武紀である。また、『古事記』の用例が中巻に集中していたことに類似して、『日本書紀』においても巻十九欽明紀を最後に、巻二十敏達紀以降には用例を見ない。

まず、神の意思が言葉などによって明確に示される夢は以下のとおりである。神武紀の1～7は、神武東征を援護する天つ神の託宣で使われる例である。崇神紀の8～14は、治世の安定を希求する天皇に、祭祀を要求する神々の託宣である。仁徳紀の26は、治水のために人柱を要求する託宣であり、欽明紀の32～34は、天皇に特定の人物を重用するよう指示する託宣である。

次に抽象的な夢の例を一覧する。15～20は崇神天皇の後継を占う場面での用例で、二皇子の夢解きが行われる。暗示的な夢であり、神は姿を現さず、言葉による意思の表明もない。21は15～20の後継占いを振り返る記事の用例である。22・23は垂仁天皇が自身の見た抽象的な夢

の話をする場面で、『古事記』に同様の例（6・7）があった。仁徳紀の27・28は鹿の夢合わせの挿話に見え、『風土記』の類話にも同様の例（8・9・11）があった。

以上、神意が明確に示される夢が十八例、抽象的な夢が十一例であった。いずれにも該当しないのは、神功紀の24・25で、沙至比跪の妹が、夢で兄を見たとき天皇に奏上する場面である。これは天皇の機嫌を窺うための偽りの夢であるため、特殊な用例と見なした。その他の四例に付言すると、35は人名に使用された例、29・31は音仮名として使用された例である。

◆『懐風藻』

1 大友皇子 伝記。

嘗夜夢。天中洞啓。朱衣老翁。捧日而至。〔70・2〕

嘗て夜夢みつ、天中洞啓し、朱衣の老翁、日を捧げて至り、〔68・5〕

2 紀古麻呂 望雪。

夢裏鈞天尚易涌。松下清風信難對。〔93・5〕

夢裏の鈞天尚し涌くこと易く、松下の清風信に對むこと難し。〔92・7〕

3 吉田宜 從駕吉野宮。

今日夢淵上。遺響千年流。〔142・6〕

今日夢の淵の上に、遺響千年に流らむ。〔142・2〕

4 藤原宇合 悲二不遇。

周日載逸老。殷夢得伊人。〔155・1〕

周日逸老を載せ、殷夢伊れの人を得たり。〔154・9〕

5 石上乙麻呂 秋夜聞情。

他鄉頻夜夢。談與麗人同。〔180・1〕

他郷頻に夜夢み、談らむこと麗人と同じ。〔179・9〕

意思の伝達が明確に示される例は検出されなかった。抽象的かつ暗示的な夢は二例確認された。1は大友皇子が見たという夢で、大海人皇子に敗北する未来が暗示されている。夢解きを要する抽象的な内容であり、予知夢的な側面もある。4の「殷夢」とは、殷の武帝が夢で説という名の聖人を見て、実際に探し出して登用した故事を指している。夢の詳細は不明だが、何者かが説を登用するように論じているわけではないと思われるため、これも抽象的かつ暗示的な夢として分類したい。

5は、夢の中で恋人に会うという内容であり、『万葉集』に同様の趣向の和歌が多数入集していることに留意したい。これまでとは異なる用例のようであるが、現実に会うことの難しい恋人と夢の中で会うということと、現実に聞くことの難しい神の言葉を夢の中で聞くということには、共通点があるように思われる。

その他の用例について、2は夢の中で天上の音楽が沸き上がるという内容であり、3は「夢のわだ」という地名を漢語に置き換えたものである。

◆『万葉集』

1 卷二・一五〇

吾恋 君曾伎賊乃夜 夢所見鶴〔㊦110下11〕

我が恋ふる 君そ昨夜 夢に見えつる〔㊦110・10〕

2 卷二・一五六

已具耳矣自得見監作共〔㊦113・5〕

※難訓歌で複数の試訓があるが、仮に「イメニダニシムトスレドモ」説に従い用例に加えることとする。

3 卷二・一六二 詞書

夢裏習賜御歌一首〔㊦115下13〕

夢の裏に習ひ賜ふ御歌一首〔㊦115・8〕

4 卷二・一七五

夢尔谷 不_レ見在之物乎〔㊦122下10〕

夢にだに 見ざりしものを〔㊦122・5〕

5 卷三・三三五

夢乃和太 湍者不_レ成而 淵有_レ乞〔㊦206下1〕

夢のわだ 瀬にはならずて 淵にもありこそ〔㊦206・1〕

6 卷四・五八一

将_レ死与妹常 夢所_レ見鶴〔㊦313下6〕

死なむよ妹と 夢に見えくる〔㊦313・6〕

7 卷四・五九一

玉匣 開阿気津跡 夢西所_レ見〔㊦316下2〕

玉櫛笥 開き明けつと 夢にし見ゆる〔㊦316・2〕

8 卷四・六〇四

剣大刀 身尔取副常 夢見津〔㊦319下2〕

剣大刀 身に取り添ふと 夢に見へ〔㊦319・2〕

9 卷四・六一五

君之枕者 夢所_レ見乞〔㊦322下2〕

君が枕は 夢に見えいと〔㊦322・2〕

10 卷四・六一一

客有公之 夢尔之所_レ見〔㊦324下14〕

旅なる君が 夢にし見ゆる〔㊦324・9〕

11 卷四・六三三

枕片去 夢所_レ見来〔㊦328下13〕

枕片去る 夢に見えける〔㊦328・7〕

12 卷四・六三九

夢所_レ見管 寐不_レ所_レ宿家札〔㊦330下5〕

夢に見えつつ 寝ねらえずけれ〔㊦330・5〕

13 卷四・六六一

左手繩師子之 夢二四所_レ見〔㊦337下5〕

さて延_レし児が 夢にし見ゆる〔㊦337・4〕

14 卷四・七〇五

葉根縵 今為妹乎 夢見而〔㊦349下21〕

はね縵 今する妹を 夢に見へ〔㊦349・9〕

15 卷四・七一〇

直一目 相三師人之 夢西所_レ見〔㊦351下10〕

ただ一目 相見し人の 夢にし見ゆる〔㊦351・7〕

16 卷四・七一一

吾恋 情盖 夢所_レ見寸八〔㊦353下1〕

我が恋ふる 心はけだし 夢に見えきや〔㊦353・2〕

17 卷四・七一一

不_レ念尔 妹之咲舞乎 夢見而〔㊦353下10〕

思はぬに 妹が笑まひを 夢に見へ〔㊦353・5〕

18 卷四・七二四

- 名姉之恋曾夢尔所_レ見家留〔㉔355 下 16〕
 なねが恋ふれそ 夢に見えける〔㉔355・11〕
 19 卷四・七四一
 夢之相者 苦有家里〔㉔360 下 19〕
 夢の逢ひは 苦しかりけり〔㉔360・10〕
 20 卷四・七四四
 夢尔相見_二将_レ来云比登乎〔㉔361 下 15〕
 夢に相見に 来むと言ふ人を〔㉔361・6〕
 21 卷四・七四九
 夢_二谷 所_レ見者社有〔㉔362 下 19〕
 夢にだに 見えばこそあれ〔㉔363・1〕
 22 卷四・七六七
 得飼飯而雖_レ宿 夢尔不_二所_レ見来〔㉔368 下 11〕
 折ひて寝れど 夢に見え来ぬ〔㉔368・7〕
 23 卷四・七七二
 夢尔谷 将_レ所_レ見常吾者 保存毛友〔㉔369 下 19〕
 夢にだに 見えむと我は ほごけども〔㉔369・9〕
 24 卷四・七八四
 夢谷 妹之手本乎 纏宿常思見者〔㉔373 下 8〕
 夢にだに 妹が手本を まき寝とし見ば〔㉔373・4〕
 25 卷四・七八七
 如_レ夢 所_レ念鴨〔㉔374 下 7〕
 夢の_レと 思ほゆるかぬ〔㉔374・3〕
 ▼26 卷四・四九〇
 情由毛 思哉妹之 伊目尔之所_レ見〔㉔279 下 18〕
- 心ゆも 思へや妹が 夢にし見ゆる〔㉔279・10〕
 27 卷五・七九四 前置漢文
 四生起滅、方_二夢皆空_一、〔㉔22 下 5〕
 四生の起滅するは、夢の皆空しきが方_レ、〔㉔22・2〕
 28 卷五・八一〇 大伴淡等の謹状
 此琴、夢化_二娘子_一曰〔㉔34 下 14〕
 この琴 夢に娘子に化りて曰_レ、〔㉔34・8〕
 29 卷五・八一 大伴淡等の謹状
 即感_二於夢言_一、慨然不_レ得_二止黙_一。〔㉔36 下 2〕
 すなは 夢の言に感_レけ、慨然に止黙あるいと得ず。〔㉔36・6〕
 即ち夢の言に感_レけ、慨然に止黙あるいと得ず。〔㉔36・6〕
 30 卷七・一一三二
 夢乃和太 事西在来〔㉔202 下 18〕
 夢のわだ 言にしありけり〔㉔202・9〕
 31 卷七・一一〇二
 玉之裏 離小嶋 夢所_レ見〔㉔220 下 2〕
 たまのうら 離れ小島の 夢にし見ゆる〔㉔220・2〕
 32 卷七・一一三六
 夢耳 繼而所_レ見乍〔㉔228 下 5〕
 夢のみに 繼ぎて見えつつ〔㉔228・3〕
 33 卷七・一三四五
 垣津幡駕 夢見鴨〔㉔258 下 2〕
 かきつはたをし 夢に見しかぬ〔㉔258・2〕
 34 卷八・一六二〇
 夢西見乍 思曾吾勢思〔㉔363 下 4〕
 夢にし見つつ 思ひそ我がせし〔㉔363・1〕

- 35 卷九・一七二九
 暁之 夢所^レ見乍〔㉔410下16〕
 暁の 夢に見えし〔㉔410・8〕
- 36 卷九・一八〇九
 血沼^レ壯士 其夜夢見〔㉔449下6〕
 千沼^レ壯士 その夜夢に見〔㉔449・13〕
- ▼37 卷五・八〇七
 用流能伊味仁越 都伎提美延許會〔㉔33下20〕
 夜の夢にを 継ぎて見えしそ〔㉔33・11〕
- ▼38 卷五・八〇九
 麻久良佐良受提 伊米尔之美延牟〔㉔34下8〕
 枕去らずて 夢にし見えむ〔㉔34・5〕
- ▼39 卷五・八五二
 烏梅能波奈 伊米尔加多良久〔㉔50下15〕
 梅の花 夢に語りく〔㉔50・8〕
- 40 卷十・二二四一
 夢見 妹形矣〔㉔133下4〕
 夢にそ見つる 妹が姿を〔㉔133・2〕
- 41 卷十・二三四二
 如^レ夢 君乎相見而〔㉔158下10〕
 夢のいと 君を相見し〔㉔158・5〕
- 42 卷十一・二四二二
 夢見 吾雖^レ念〔㉔181下16〕
 夢に見むと 我は思^レく〔㉔181・8〕
- 43 卷十一・二四一八
- 44 吾念妹 夢谷見〔㉔183下4〕
 我が思^レふ妹を 夢にだに見む〔㉔183・4〕
- 45 卷十一・二四七九
 夢耳 受日度 年経乍〔㉔197下13〕
 夢のみを うけひ渡りて 年は経こし〔㉔197・7〕
- 46 卷十一・二五〇一
 床重不^レ去 夢所^レ見与〔㉔203下1〕
 床の辺去らず 夢に見えしそ〔㉔203・2〕
- 47 卷十一・二五四四
 夢谷 間無見君 恋尔可^レ死〔㉔213下11〕
 夢にだに 間なく見え君 恋に死ぬ^レし〔㉔213・6〕
- 48 卷十一・二五五三
 夢耳 見尚幾許 恋吾者〔㉔215下13〕
 夢のみに 見てすらくこた 恋ふる我は〔㉔215・7〕
- 49 卷十一・二五六九
 毎^レ夜君之 夢西所^レ見〔㉔219下6〕
 夜ごとに君が 夢にし見ゆる〔㉔219・4〕
- 50 卷十一・二五八七
 妹置 吾稻金津 夢所^レ見乍〔㉔223下10〕
 妹を置きて 我寝^レねかねし 夢に見えし〔㉔223・6〕
- 51 卷十一・二五八九
 夢不^レ見 受早宿跡〔㉔224下1〕
 夢にも見えず うけひて寝^レれむ〔㉔224・1〕
- 52 卷十一・二五九五
 夢谷 何鴨不^レ所^レ見〔㉔225下6〕

- 夢にだに なにかも見えぬ 〔225・3〕
- 52 卷十一・二六〇一
現毛 夢毛吾者 不_レ思_レ寸 〔226下14〕
現_レこも 夢_レにも我_レは 思_レはずき 〔226・7〕
- 53 卷十一・二六二一
措衣 著有跡夢見津 〔231下18〕
摺_レり衣 着_レりと夢_レに見_レつ 〔231・8〕
- 54 卷十一・二六三四
面影不_レ去 夢所_レ見_レ社 〔235下2〕
面影去_レらず 夢_レに見_レえこそ 〔235・2〕
- 55 卷十一・二七五四
思而宿者 夢所_レ見_レ来 〔264下11〕
偲_レひて寝_レれば 夢_レに見_レえけり 〔264・6〕
- 56 卷十一・二七八六
赤裳之為形 夢所_レ見_レ管 〔272下2〕
赤裳_レの姿 夢_レに見_レえつつ 〔272・2〕
- 57 卷十一・二八二二
袖反之者 夢所_レ見_レ也 〔278下13〕
袖返_レししは 夢_レに見_レえきや 〔278・7〕
- 58 卷十一・二八三三
吾背子之 袖反夜之 夢有_レ之 〔278下17〕
我が背_レ子が 袖返_レす夜の 夢_レなり 〔278・8〕
- 59 卷十一・二八四四
夢不_レ所_レ見_レ而 年之経去_レ礼者 〔279下2〕
夢_レに見_レえずて 年_レの経ぬれば 〔279・1〕
- 60 卷十一・二八一五
真気永 夢毛不_レ所_レ見 雖_レ絶 〔279下6〕
ま日_レ長く 夢_レにも見_レえず 絶_レえぬとも 〔279・3〕
- 61 卷十一・二八四二
一夜不_レ落 夢見_レ与 〔291下8〕
一夜も落ちず 夢_レに見_レえこそ 〔291・6〕
- 62 卷十一・二八四八
夢谷 何人 事繁 〔293下6〕
夢_レにだに なにしか人の 言_レの繁_レけむ 〔293・3〕
- 63 卷十一・二八四八
寤者諾毛不_レ相夢左倍 〔293下7〕
現_レには うべも逢_レはず 夢_レこやく 〔293・5〕
- 64 卷十一・二八四九
彼夢 見_レ継哉 〔293下12〕
その夢_レにしも 見_レ継_レげりや 〔293・6〕
- 65 卷十一・二八五〇
夢谷 相見_レ与 我恋_レ国 〔293下17〕
夢_レにだに 逢_レふと見_レえこそ 我_レが恋_レぶ_レくに 〔293・8〕
- 66 卷十一・二八七四
情平會 使_レ尔遣_レ之 夢所_レ見_レ哉 〔300下1〕
心をそ 使_レひに遣_レりし 夢_レに見_レえきや 〔300・2〕
- 67 卷十一・二八八〇
夢耳 手本纏_レ宿登 見_レ者辛_レ苦毛 〔301下6〕
夢_レのみに 手本_レまき寝_レと 見_レれば苦_レしも 〔301・3〕
- 68 卷十一・二八九〇

- 吾背子之 夢尔夢西 所_レ見還良武 [ⓐ303 下 13]
我が背子が 夢に夢にし 見え反るらむ [ⓐ303・7]
69 卷十二・二八九〇
- 吾背子之 夢尔夢西 所_レ見還良武 [ⓐ303 下 13]
我が背子が 夢に夢にし 見え反るらむ [ⓐ303・8]
70 卷十二・二九一一
- 夢尔吾 今夜将_レ至 屋戸閉勿勤 [ⓐ308 下 5]
夢に我 今夜至らむ 屋戸さすなゆめ [ⓐ308・3]
71 卷十二・二九一四
- 愛等 念吾妹乎 夢見而 [ⓐ308 下 14]
愛しと 思ふ我妹を 夢に見し [ⓐ308・7]
72 卷十二・二九一七
- 夢可毛 吾香感流 恋之繁尔 [ⓐ309 下 8]
夢にかも 我か迷へる 恋の繁き [ⓐ309・4]
73 卷十二・二九三七
- 妹之容儀乃 夢_二四_三湯流 [ⓐ313 下 19]
妹が姿の 夢_二し_一見ゆる [ⓐ313・9]
74 卷十二・二九五五
- 夢可登 情班 [ⓐ318 下 15]
夢かと 心迷ひぬ [ⓐ318・7]
75 卷十二・二九五六
- 夢尔所_レ見 君之容儀者 [ⓐ318 下 20]
夢に見えけり 君が姿は [ⓐ318・9]
76 卷十二・二九五七
- 床辺不_レ離 夢尔所_レ見乞 [ⓐ319 下 4]
77 卷十二・二九五八
- 床の辺去らず 夢に見えこそ [ⓐ319・3]
夢谷 不_レ止見与 [ⓐ319 下 8]
夢にだに 止まず見えこそ [ⓐ319・4]
78 卷十二・二九五九
- 夢谷 嗣而所_レ見与 [ⓐ319 下 14]
夢にだに 継ぎて見えこそ [ⓐ319・7]
79 卷十二・二九九五
- 晝薦 重編数 夢西将_レ見 [ⓐ328 下 2]
晝み薦 隔て編む数 夢_二し_一見えむ [ⓐ328・2]
80 卷十二・三〇〇八
- 夜夢乎 次而所_レ見欲 [ⓐ354 下 12]
夜の夢にを 継ぎて見えこそ [ⓐ354・7]
81 卷十二・三一一一
- 吾可_レ死者 夢所_レ見哉 [ⓐ355 下 8]
我が死ぬべきは 夢に見えきむ [ⓐ355・5]
82 卷十二・三一一二
- 夢見而 衣乎取服 装束間尔 [ⓐ355 下 11]
夢に見て 衣を取り着 装束間ひ [ⓐ355・6]
83 卷十二・三一一七
- 何処従鹿 妹之入来而 夢所_レ見鶴 [ⓐ356 下 19]
いづくゆか 妹が入り来て 夢に見えこそ [ⓐ357・1]
84 卷十二・三一二〇
- 荒田夜之 全夜毛不_レ落 夢所_レ見欲 [ⓐ357 下 15]
新た夜の 全夜も落ちず 夢に見えこそ [ⓐ357・8]

85 卷十二・三二二八

吾妹子 夢見来〔³⁶⁰下1〕

我妹子を 夢に見え来と〔³⁶⁰・1〕

86 卷十二・三二四二

夢谷 吾所^レ見社 相日左右二〔³⁶³下5〕

夢にだに 我に見えこそ 逢はむ日まづく〔³⁶³・3〕

87 卷十二・三二六二

此間毛本名 夢西所^レ見〔³⁶⁷下14〕

こゝにももとな 夢にし見ゆる〔³⁶⁷・7〕

88 卷十三・三二二七

新夜乃 好去通牟 事計 夢尔令^レ見社〔³⁹⁰下13〕

新た夜の 幸く通はむ 事計り 夢に見えこそ〔³⁹⁰・10〕

89 卷十三・三二八〇

卯管庭 君尔波不^レ相 夢谷 相跡所^レ見社〔⁴¹⁷下17〕

現には 君には逢はず 夢にだに 逢ふと見えこそ〔⁴¹⁸・1〕

90 卷十三・三二八一

現庭 君者不^レ相 夢谷 相所^レ見欲〔⁴¹⁸下11〕

現には 君には逢はず 夢にだに 逢ふと見えこそ〔⁴¹⁸・10〕

91 卷十三・三二八三

眠夜乎不^レ落 夢所^レ見欲〔⁴¹⁹下8〕

寝る夜を落ちず 夢に見えこそ〔⁴¹⁹・5〕

92 卷十三・三三二四

夢鴨 現前鴨跡 雲入夜之 迷間〔⁴³⁹下2〕

夢かも 現かもと 曇り夜の 迷える間に〔⁴³⁹・9〕

▼93 卷十三・三三七一

伊米能未尔 母登奈見要都追 安乎祢思奈久流〔⁴⁹²下1〕

夢のみに もとな見えつつ 我を音し泣くる〔⁴⁹²・2〕

94 卷十六・三八四八 詞書

夢裏作歌一首〔⁴¹²³ト5〕

夢の裏に作る歌一首〔⁴¹²³・2〕

95 卷十六・三八四八 左注

夢裏作^二此恋歌^一贈^レ友。〔⁴¹²³下8〕

96 卷十六・三八五七 左注

夢の裏にこの恋歌を作りて友に贈る。〔⁴¹²³・5〕

夢裏相見、覚寤探抱、曾無^レ触^レ手。〔⁴¹²⁶ト16〕

夢の裏に相見、覚き悟めて探り抱くに、かつて手に触ることな

し。〔⁴¹²⁷・5〕

97 卷十七・四〇一一 詞書

思^二放逸鷹^一、夢見感悦作歌一首 并短歌〔⁴²¹³ト1〕

放逸せる鷹を思ひ、夢に見て感悦して作る歌一首 并せて短歌〔⁴²¹³・1〕

98 卷十七・四〇一一〜四〇一五 左注

粵以夢裏有二娘子^一。〔⁴²¹⁷下5〕

こゝに夢の裏に娘子あり。〔⁴²¹⁷・10〕

99 卷十九・四二三七

夢耳 手本卷寐等 見者須便奈之〔⁴³³⁸下21〕

夢のみに 手本まき寝と 見ればすべなし〔⁴³³⁸・11〕

▼100 卷十五・三六三九

許己呂我奈之久 伊米尔美要都流〔⁴⁴¹下7〕

心悲しく 夢に見えつる〔⁴⁴¹・5〕

- ▼101 卷十五・三六四七
比登欲毛於知受 伊米尔之美由流〔④44ト下〕
一夜も落ちず 夢にし見ゆる〔④44・2〕
- ▼102 卷十五・三六九四
伊米能其等 美知能蘇良治尔 和可札須流伎美〔④58下8〕
夢の(こ)と 道の空路に 別れする君〔④58・5〕
- ▼103 卷十五・三七一四
伊米尔太尔 比左之久見牟乎 安气尔家流香聞〔④64下11〕
夢にだに 久しく見むを 明けにけるかも〔④64・5〕
- ▼104 卷十五・三七三五
伊米尔毛伊母我 美延射良奈久尔〔④70下2〕
夢にも妹が 見えざらなくに〔④70・2〕
- ▼105 卷十五・三七三八
比登欲毛意智受 伊米尔之見由流〔④70下14〕
一夜も落ちず 夢にし見ゆる〔④70・8〕
- ▼106 卷十七・三九二九
多妣尔伊仁思 吉美志毛都芸氏 伊米尔美由〔④164下7〕
旅に去にし 君しも継ぎて 夢に見ゆ〔④164・4〕
- ▼107 卷十七・三九七七
孤悲家礼許曾婆 伊米尔见要家礼〔④192下18〕
恋ひけれこそば 夢に見えけれ〔④192・11〕
- ▼108 卷十七・三九七八
伊米尔波见礼登 宇都追尔之 多太尔安良称婆〔④193下11〕
夢には見れど 現にし 直にあらねば 恋しけく〔④193・9〕
- ▼109 卷十七・三九八〇

- 伊米尔波母等奈 安比见礼騰〔④195ト5〕
夢にはもとな 相見れど〔④194・11〕
- ▼110 卷十七・三九八一
許己呂之遊気婆 伊米尔美要家利〔④195ト11〕
心し行けば 夢に見えけり〔④195・3〕
- ▼111 卷十七・四〇一一
安我麻都等吉尔 乎登壳良我 伊米尔都具良久〔④214下4〕
我が待つ時に 娘子らが 夢に告ぐらへ〔④215・4〕
- ▼112 卷十七・四〇一一
祢毛許呂尔 奈孤悲曾余等會 伊麻尔都气都流〔④214下11〕
ねもころに な恋ひそよとそ いまに告げける〔④215・13〕
※イマはイメ(夢)の転とする説に従う。
- ▼113 卷十七・四〇一二
安我麻都多可乎 伊米尔都气追母〔④216下8〕
我が待つ鷹を 夢に告げつも〔④216・4〕
- 意思の伝達が明確に示される託宣的な夢は、以下の八例である。
97・98・111・112・113の五例は、いずれも「放逸せる鷹を思ひ、夢に見て感悦して作る歌一首并せて短歌」(四〇一一)の用例である。
大切な鷹が逃げたので神の社に祈ったところ、夢に娘子が現れ、いずれ帰って来ることを告げる。28・29・39の三例は託宣ではないものの、類似の用例として扱う。28・29は、桐で作られた琴が夢の中で女性の姿となって現れ、末永い寵愛を乞うという内容である。39は、梅の花が夢に現れ、酒に浮べて欲しいと訴える内容である。いずれも植物の精霊という点が共通している。

解釈を要するような抽象的な夢は以下の三例である。7の玉櫛笥が開く夢は、恋の露見を暗示しており、8の剣大刀を身に取り添える夢は、恋人に会う前兆と解釈されている。また、53の摺り衣を着る夢は、異性と接することの暗示とされる。

意思の伝達が明確な夢か、抽象的な夢か、いずれとも判別しがたいのは、以下の二例である。88は三諸山の神に夢の神託を請う内容であるが、実際にはまだ夢を見ていない状態であるため、どのような内容になるのかは不明である。36は、千沼壮士が夢で冤原処女の死を知ったという内容であるが、夢の詳細は記されていない。

最も多いのは、家族や恋人などといった親しい人物を、夢に見ることに関連する用例である。実際に夢に現れるのは1・6・10・15・17・19・26・31・33・2・34・35・40・47・49・55・56・58・60・67・69・71・73・75・82・83・87・93・96・99・101・104・110の四十七例で、この内1は挽歌である。31は夢の中で懐かしい土地を見る例、33は夢の中でかきつばたを見る例であるが、いずれも女性の暗喩とする説があるため、ここに含めることとする。また、60は「例え夢に現れなくても自身の恋は止まない」という内容であるため、実際には夢に現れているものと想定してここに含める。

夢に現れて欲しいという願望を歌うのは、2・9・21・24・37・42・45・46・50・51・54・59・61・63・65・76・78・80・84・86・89・91・103の三十一例である。9は「相手の枕を夢に見たい」という例であるが、実際には本人を見たいのであろうから、同じ範疇に分類することとする。62・63は、夢の中でまで人の噂が高くて思うように会えないことを嘆いているため、せめて夢で逢いたいものと見なしでここに含める。

「私のことを夢で見て欲しい」と願うのは、16・57・64・66・79・81の六例、「あなたの夢に出よう」と表明するのは20・38・70の三例である。以上のように、親しい人物を夢に見ることに関連する用例は多様であるため、今後はより丁寧な考察を進めていきたい。

「まるで夢のよう」などのように、物事を夢に例える表現は25・27・41・74・92・102の六例である。ただし、気が動転して夢と現実を混同する表現との区別は曖昧であるため、両者を一括りにまとめた。その他では、「夢にも思わなかった」と驚きを表明するのは4・52の二例である。3・94・95の三例は夢の中で歌を詠む例である。5・30の二例は「夢のわだ」という地名(淵の名)に使用されている例である。

◆『三教指帰』

1 下・仮名乞兒論

挙似夢之意。入十八之亭。[125・12]

夢に似たる意を挙げて十八の亭に入る。[124・13]

2 下・仮名乞兒論

網繆妻孥。無異楚宋之夢遇神女。[133・12]

網繆たる妻孥は楚宋が夢に神女に遇へるに異ならんと無し。[132・12]

3 下・仮名乞兒論

睡睡師吼。戲夜夢之谷。[141・11]

睡睡として師のごとくに吼えて夜夢の谷に戯る。[140・12]

2は夢の中で美しい神女に会ったという故事の引用であるが、引用元の「神女賦」はただ神女の美しさを描写するのみであり、意思の伝

達などではない。また、運命を暗示する抽象的な夢というわけでもない。残りの二例は比喩的な表現に使用されており、1は心という不確かなものを夢に例え、3は人生という儂いものを夢に例えている。

◆『日本国現報善悪霊異記』

- 1 上・第十八
于^レ時夢見、有人曰、〔73・4〕
時に夢見らく、有る人の曰はく、〔71・3〕
- 2 上・第十八
從^レ夢醒驚而思怪之、〔73・6〕
夢より醒め驚きて思ひ怪しび、〔71・7〕
- 3 上・第十八
客人具述^二夢状^一、〔73・12〕
客人、具に夢の状を述べ、〔72・2〕
- 4 中・第十三
優婆塞夢見^レ婚^二天女像^一、〔160・15〕
優婆塞、夢に天女の像に婚ふと見ゆ、〔160・1〕
- 5 中・第十五
彼夜請師、夢見、〔167・3〕
彼の夜請けし師、夢に見らる、〔165・6〕
- 6 中・第十五
請師自^レ夢驚醒、〔167・7〕
請けし師、夢より驚き醒め、〔165・13〕
- 7 中・第十五
唯有^二夢悟^一。〔167・8〕

唯^たし夢に悟ること有り」といふ。〔165・15〕

- 8 中・第十五
具陳^二夢状^一。〔167・8〕
具に夢の状を陳ぶ。〔165・16〕
- 9 中・第二十 表題
依^二惡夢^一至^二誠心^一使^レ誦^レ經、〔181・11〕
惡夢に依りて、誠の心を至して經を誦せしめ、〔180・1〕
- 10 中・第二十
為^レ女夢見^二惡瑞相^一。〔181・15〕
女の為に夢に惡しき瑞相を見き。〔180・8〕
- 11 中・第二十
然凶夢相、復猶重現。〔180・17〕
然るに凶しき夢の相、復猶し重ねて現る。〔180・11〕
- 12 中・第二十
遣使到問、陳^二凶夢状^一、〔182・6〕
使を遣はして到り問ひ、凶しき夢の状を陳ぶ、〔181・7〕
- 13 中・第三十二
時寺檀越岡田村主石人、夢見、〔214・12〕
時に寺の檀越岡田村主石人、夢に見らる、〔212・11〕
- 14 中・第四十一
「我意如^レ夢。今醒如^レ本」。〔235・10〕
「我が意夢の如くにありき。今は醒めて本の如し」といふ。〔233・7〕
- 15 下・第十六
十二月廿三日之夜夢見。〔288・13〕

- 十二月二十三日の夜に、夢見き。 [286・9]
- 16 下・第十六
自^レ夢驚醒[、] [289・3]
夢より驚き醒めて、 [287・10]
- 17 下・第十六
述^ニ於^一夢状^一。 [289・4]
夢の状を述ぶ。 [287・12]
- 18 下・第十六
悟^レ夢曰、[「]今我罪免之矣[」]。 [289・8]
夢に悟して曰はく、「今は我が罪免れぬ」といひき。 [288・3]
- 19 下・第二十四
夢人語言、[「]為^レ我誦^レ經[」]。 [311・7]
夢に人語りて言はく、「我が為に經を読め」といふ。 [308・13]
- 20 下・第二十五
若是夢矣。若是魂矣。 [315・10]
若しは是れ夢か。若しは是れ魂か」といふ。 [314・4]
- 21 下・第二十六
語^ニ夢見状^一而言[、] [318・16]
夢に見し状を語りて言ひつゝ、 [316・10]
- 22 下・第二十六
伝^ニ語^一夢状^一、即日死亡。 [318・19]
夢の状を伝へ語り、即日死に亡す。 [316・16]
- 23 下・第二十九
如^レ夢忽死。 [327・13]
夢の如くにして忽に死にき。 [326・12]
- 24 下・第三十六
為^レ父惡夢見[、] [347・9]
父の為に悪しき夢を見つゝ、 [345・15]
- 25 下・第三十八
然而寢之子時夢見。 [364・11]
然して寝テアル子の時に、夢に見る。 [356・12]
- 26 下・第三十八
夢答未^レ詳。 [365・3]
夢の答、詳かならず。 [358・4]
- 27 下・第三十八
又僧景戒夢見事[、] [365・22]
又、僧景戒が夢に見る事、 [360・3]
- 28 下・第三十八
三月十七日乙丑之の夜夢見。 [365・22]
三月十七日乙丑の夜に夢に見る。 [360・4]
- 29 下・第三十八
夢答未^レ来。 [366・5]
夢の答来らず。 [360・13]
- 30 下・第三十八
待^ニ夢見答^一而知之耳。 [366・5]
夢に見し答を待ちて知らまくのみとおもふ。 [360・15]
- 意思の伝達が言葉などによって明確に示されるのは、以下の十五例である。1〜3（上第十八）は、明らかな託宣であり、修行者が観音菩薩に祈願したところ、夢のお告げを得る。5〜8（中第十五）と13

(中第三十二)と15〜18(下第十六)と19(下第二十四)は、仏罰に苦しむ人物が救いを求めて夢に現れる例である。いずれも意思の伝達が明確になされる。21・22(下第二十六)は、罪を犯した人物が、夢で閻魔王宮に召され現報を受けることを宣告される。

次に、夢解きを要するような抽象的な夢は十一例である。下第三十八縁には、著者景戒が見た二つの夢の詳細な記述があり、それぞれ25・26と27〜30が該当する。景戒は二つの夢に何らかの意味があると考え、その解答を待っている状況である。9〜12(中第二十)においては、夢の内容が具体的に記されておらず、娘に関する悪い夢を見た母が、娘のために僧侶に読経を依頼する。娘がどのような災いに巻き込まれるかまでは予測できていないことから、抽象的な夢であったと推測される。24(下第三十六)では、父に関する悪い夢を見た息子が、夢の内容を簡単に報告する。見知らぬ兵士三十余人が父を連れに来たというもので、それを不吉な兆しと解釈している。

4(中第十三)は、夢で吉祥天女と交わった話である。吉祥天が僧侶の欲望に応えたという点において、吉祥天の意思が働いていると言える。託宣的な夢の範疇に数えても良いかもしれないが、本稿では保留することとする。

比喩的な用法は以下の三例で、夢と現実を混同するような表現を含める。23(下第二十九)は「夢のようにあつてなく死んだ」と比喩的に表現している。14(中第四十一)では、蛇との交接によって気を失っていた娘が「夢のよう」であったことを報告し、比喩的な表現とも意識の混同とも解釈できる。20(下第二十五)では、男が生きていたことに驚いた家族が「これは夢か」と発言し、やはり両方の解釈が可能である。

三 おわりに

以上、上代の文献資料における「夢」の用例を概観した。その結果、託宣的な夢において意思を伝達するのは、神や仏だけではなく、死者や植物の化身などの場合もあり、多様であることが知られた。また、夢解きを要するような抽象的・暗示的な夢においては、神託に該当するものと、神託かどうか判別できないものがあつた。一方『万葉集』では、家族や恋人などの親しい人物に対する思念の発露が多数を占めており、相聞歌における表現の定型として確立し、多様な広がりを見せていた。

憑依を伴う託宣が存在する一方で、なぜ夢を介する託宣も存在するのか、本稿で行った整理・分析を、両者の違いを考察する足がかりとしたい。

(ふじさき ゆうじ・有明工業高等専門学校)